



イタリアで考えたこと

今日から13Rも再起動であるが、「再起動」どころか、宿題を片付けたり、宿題テスト、そして早くも一週間後に迫った前期期末考査の準備などに取りかかったりして、すでに全力疾走状態の人がほとんどだろう。

一方、私は夏休みの終わりに7泊8日（移動も含めれば10日に及ぶ）バカンスに出かけていたため、その非日常的祝祭空間・時間から、日常の日比谷空間になかなか戻って来られずに困っているところである（泣・笑）。

*

大学時代の友人2人（ともに独身男性）と私たち夫婦の合計4名で、イタリア南部のアマルフィ海岸からナポリを経て、トスカーナ地方の中心都市、フィレンツェとシエナを訪ねてきた。ちょうど大きな地震があったりしたため、ご心配のメールなどをいただいたりしたが、特に大きな影響もなく旅行を続けることができたのは幸いであった。

さて、友人の一人がイタリア語に堪能なため、ツアーなどではなく、すべて自分たちで計画した街歩きの旅だったが、それ故に様々な体験をすることができた。その中で一番大きく感じたのは、当たり前といえば当たり前なのだろうが、日本の安全と便利さである。

例えば、公共のバスに乗ろうとすると、まず券売機が壊れていて使えないことが多い（というか、今回6～7回バスに乗ったが、全部壊れていた…）。また、時刻表に従ってバス停でバスを待っていたところ、最大で1時間半待たされた（これは観光地でのこと）。

鉄道はかなり時間通りに運行されるようになってきているようだが、切符の券売機が壊れているのはバスと同じ。ただ、バス停とは

違って駅員がいるので、とりあえず窓口の人がいればそこで切符を買うことができるが、おつりの計算を（わざと？）間違えられることもあった。また、たとえ券売機が稼働していても、その動作はきわめて緩慢で、一人が購入するのに30秒くらいかかるし、同じく、自動改札に切符を入れても、改札口を通れるようになるまで、2～3秒かかる始末である。これは地方の観光地ではなく、ナポリという一大観光都市での経験である。

こういう経験をすると、日本がどれほど快適・正確な空間かが分かるというものだ。

一方、こんな体験もした。ナポリの町でのんびり夕食を食べてホテルに帰ろうとした時のこと、泊まっているホテルが見晴らしのよい場所にあるため、最寄り駅からフニコラーレ（歌の「フニクリ・フニクラ」でも有名な「登山電車」。普通名詞）に乗らなければならないのだが、切符を売っている駅の売店はすでに閉店しているし、券売機は壊れているしで困ってしまったのである（終電前なのに切符を売る店が閉店しているところがイタリアらしい…）。と、フニコラーレの運転手が降りてきて、「どうせ上まで行くんだから、乗って行きなよ」と、改札口を開けてタダで乗せてくれたのである。（イタリア語ができる友人がいて本当によかった…）

自動券売機が正確に機能する日本なら、こんな会話はあり得ないだろう。しかし、正確・便利でない分、人と人とのコミュニケーションが成り立っているのかも知れない。我々が便利さと引き替えに失ったものは何なのだろう？と、そんなことを考えた経験である。